○

林（夜）

「ワクワクする。

「しゃがんで穴を通ろうかな」

「何ですか？　意味分かんない」

「智弘、穴を通りながら、行こう」

「行きます。行くから」

「行こうぜ。行くんだよ。行くったら、もう一軒行くから」

「行こう、行こう。行こう、行こう。行こう、行こう。

○居酒屋（夜）

彩「上着をハンガーにかけている。

寒くないんですか？」

彩「全然、大丈夫」

智「席に座る。

彩「何飲む？」

智「私、とりあえず生で」

○道路（夜）

彩「ふらふらと顔が赤くなっており、千鳥足で歩いている。

智「弘、少しおしゃべりしたくないの？」

彩「朝早く、夜遅くまで働いてます？」

智「中学生の頃、学校の曲がり角で待ち合わせしてたっけ。

彩「なんか、懐かしい。

智「学生時代、走って来て、笑顔で手を振ってくれる。

彩「みんな、何もそうだね。

智「あの子は無理だって、みんなが言ってた。

彩「中学生の頃、曲がり角で待ってるだけで、ドキドキしてた。

智「遮断機の音が聞こえると、胸が高鳴ってた。

彩「あの子、今頃どうしてるかな。

智「あの頃、みんなで集まって、夜遅くまで学校の裏で飲んでた。

彩「懐かしい

彩「手伝ってくれるんですか？」

智弘「やる。やろう。」

椅子を座り直し、パソコン作業を始める。

彩、パソコン作業を始める。

× × × ×

彩、コピー機の前で、印刷が終わるのを待っている。

智弘、机で資料をまとめている。

印刷が終わり、彩、資料を持って急いで机に戻る。

智弘「いけるる？」

彩「はい、行きましょう」

智弘、資料を持って出て行く。

× × × ×

日彩が落ち始めている。

智弘と智弘、疲れた様子で戻って来る。

智弘、自分の机に資料を置き、

「あり がとう。助かった」

彩「次からはお願いしますよ」

智弘「椅子に座る。

申し訳ない。お詫びってわけじゃないけど、飯行かない？」

彩「今から（少しダルそうに）今ですか？」

智弘「日は止めとくか？」

彩「いや、行きましょう！」

智弘「立ち上がって、リュックを背負う。

上着忘れたはず？」

彩「すよ。急いでたんで」

智弘「ご めんなさい、外、めっちゃ寒いよ」

智弘「椅子にかんつって」

彩「これ着ている上着を持って、久しぶりに外出するんですか？」

智弘「口 大丈夫。上着忘れて帰るし」

彩「さ どうすんじゃ」

智弘「俺は よく、」

彩「上着を智弘の リュックを下ろして、智弘の

智弘「はい」

彩「よし、着る。じゃあ行こう」

○アパート・201号室（深夜）

午後11時を示すアラーム時計、鳴る。

結城彩（26）、アラームを止める。

コンタッチの上には、缶コーヒー、パソコン、積み上げられた資料、アラーム時計、置かれている。

彩「デートも来ないし……」

（目を擦りながら）終わんないじゃん。

トントンと指で机を叩きだす。指以外は動いていない。

ザーッと、窓の外から音が聞こえ始め、もう一度。

「いい空間を空けずに、パソコンを閉じる。背後のスーツを持ち、パソコンガーに掛ける。

○道路（朝）

彩、スーツ姿で早足で歩いている。リュックを背負い、右手には缶コーヒ。

△△ビル・オフィス（朝）

彩、早歩きで入って来て、自分の席に座り、リュックを机に置く。

隣の席では、久口智弘（36）、机に顔を伏せて眠っている。

彩「リュックの中を漁っていると、智弘、彩に気づいて、

智弘「今、何時？」

（怒り気味に）7時過ぎです」

智弘「はぁ〜」

彩「パソコンを開くと、データの送信前の画面が表示されている。

智弘「嘘でしょ？」

彩「智弘、智弘のパソコン画面を見て、嘘じゃないですよ。来てないですから」

智弘「代わりにごめん！手伝って下さい」

彩「智弘代わりに机の上のスマホを見ると、結城から数件の不在着信がある。

智弘「本当に申し訳ない」

彩「手伝って下さい」